

夢童

菅波 茂

AMDANAパール支部から支援要請が来た。09年5月ごろから、ネパール中西部ベリ県ジャジャルコット郡の村々で下痢が蔓延して、多くの人が死亡している」と。コレラの大流行か。7月31日、本部職員ウィーラバグと、岡山大病院長と救急部長・氏家教授の許可を得て、朴範子医師が現地へ飛んだ。

8月4日、朴医師らが到着した時には、下痢疾患の受診や入院患者数は減っていた。感染ルートは水との説が有力だったが、一方で、死んだ水牛を食べた極貧の村人から感染が広がったとの説もあった。ジャジャルコット郡には7000人の村人がいる。パダル村の小学校には150人の生徒がいた。学校のトイレは最悪だった。戸を開けると酷い臭いで意識が朦朧とするほどだった。大便で覆われ、無数のウジ虫が這いずり回っていた。戸を二度と開ける気がし

中心に医療キャンプで治療活動に入っていた。支部には、交代要員として医療チームに加わるよう要請があったようだ。AMDANAパール支部は最大の医療NGOとして評価されているからである。

ネパール・インド 感染症封じ込めに向けて

なくて、現場写真を撮り忘れた。

唯一の女性スタッフだった朴医師のためにトイレを囲ったトタン板が、夜は朴医師のベッドを囲っていた。どこまでも心優しい村人だった。日本では当たり前な衛生習慣は皆無。各家庭には電気もトイレもなかった。雨期になると川は増水し、川を横切る道路は使用できなくなる。日本では信じられない生活環境の中で、下痢疾患の原因が特定できなかったのは残念だった。

8月26日から3日間、AMDANAインド支部が拠点を置くインド共和国カルナタカ州マニパール大学で、災害医療プログラムを開いている。AMDANAはマニパール大学と協定を結び、この大学をAMDANAの南西アジア地域災害センターと位置付けている。センターは南西アジア全体の災害に対応するAMDANA多国籍医師団の根拠地であり、スタッフの教育プログラムも担当する。

うれしいことに、スイス・ジュネーブに本部を置く世界保健機関が新型インフルエンザなどの新興感染症に対応する「感染症勃発警戒および対策ネットワーク(GOARN)」から専門家の派遣を決めてくれた。今回のプログラムを共同主催する岡山大学長寿社会医学講座の土居弘幸教授のご協力に感謝申し上げたい。

現在、過去25年間の活動を総括して今後の5カ年計画を作成中だ。支部長が一堂に会する25周年の場で5カ年計画を発表し、ご支援をいただいている皆様方と共に、「救える命があればどこへでも」のスローガンを再確認できれば最大の喜びである。AMDANA創立25周年祝賀会発起人の方々は、この紙面を借りてお礼を申し上げたい。

AMDANAグループ代表